

【草花の部屋】

バイカモ (キンポウゲ科キンポウゲ属 *Ranunculus nipponicus* var. *submersus*)

和名 ; バイカモ (梅花藻) **別名** ; ウメバチモ、 ウメバチソウ **英名** ;

キンポウゲ目 多年草

原産地 ; 日本

花言葉 ; 幸せになります **花の色** ; 白



← ↓ 写真－ 1、 2 バイカモ

撮影日 : 2023 年 8 月 6 日

撮影場所 : 米原市醒ヶ井地蔵川にて

撮影者 : M さん



← 写真－ 3 バイカモ

撮影日 : 2023 年 8 月 6 日

撮影場所 : 米原市醒ヶ井

地蔵川にて

撮影者 : M さん



←↑ 写真－４、５ バイカモの花
 撮影日：2023 年 8 月 6 日
 撮影場所：米原市醒ヶ井地蔵川にて
 撮影者：M さん

↓ 写真－６ バイカモ
 撮影日：2023 年 8 月 6 日
 撮影場所：米原市醒ヶ井地蔵川にて
 撮影者：M さん

米原市の JR 醒ヶ井駅から、徒歩 10 分ほどの場所にある地蔵川に群生していました。旧中山道の醒ヶ井宿の中を流れている川です。昔、日本武尊が、体を洗ったと伝わっている加茂神社の湧水「居醒の清水」が水源となっています。透明感が心地良さを醸し出してくれていました。

JR 醒ヶ井駅から車で 10 分ほどの醒ヶ井養鱒場でも、観ることができます。

バイカモ(梅花藻)は、冷涼で流れのある清流中に生育する沈水性の多年草の水草で、初夏から初秋にかけてウメの花のような白い花を水中につけます。日本の固有種で、花がウメに、葉が藻に似るためバイカモと名付けられたそうです。低水位時には陸生形になります。

都道府県別レッドデータブックで絶滅危惧種に指定されている場合も多いそうです。

水中に茎を匍匐させ、節から不定根を出して水底に定着します。茎の長さは 2m 近くになることもあるそうです。

茎は 3～4 回分枝しますが折れやすいく、葉は互生で葉柄は短く、葉身は 3 出複



葉で扇状に細裂します。各小葉はさらに2裂して最終裂片は糸状になります。托葉は丸くふくらみ、表面に純毛があり、短い鞘状となって葉柄を抱きます。

開花期は5～10月で、花は葉腋から葉に対生の位置につき、花柄を水中または水上にのばし、白い五弁花を一輪頂生します。穏やかな流れでは水の上に立ち、流れになびいて揺れ動くが、急流では水中花のようになります。

花弁は5枚で、その基部は黄色く、多数の雄しべと雌しべ、そして5つの萼があります。花の後にできる果実は小さな楕円球が多数集まった球形で、短毛があり、乾くと表面に横皺ができます。

5～7月に採取した若い茎葉や花や蕾が山菜として食用になるそうです。柔らかでクセがなく、御浸しや酢の物にして食べるのが普通だそうです。ウダゼリ(岡山)、カワマツ(山形)などの別名があります。また、全草を乾燥して利尿剤に利用できるそうです。

バイカモには水生昆虫が寄生するほか、ハリヨなどの淡水魚が巣や産卵床として利用することが知られています。

< ちょっと一言 >

*バイカモは清流に生育し、花期に多くの白い花を咲かせることから、夏期に本種を目当てとした観光客が訪れる地域がいくつかあります。米原市の醒ヶ井醒井にある地蔵川の他に、静岡県三島市の三島梅花藻の里、福島県郡山市の清水川、山形県長井市内の水路、宮城県白石市の白石城下を中心に白石川からの用水、沢端川とその支流等。

*ハリヨ(針魚 *Gasterosteus aculeatus* subsp.) は、トゲウオ目トゲウオ科に分類される淡水魚の一種。

・日本固有亜種と考えられ、昭和初期までは滋賀県、岐阜県、三重県に生息地があったそうですが、現在では滋賀県東部と岐阜県西濃地区、岐阜地区の平野部の湧水地のみで生息が確認されているそうです。米原市の河川(地蔵川)では、人為的に放流されたと見られる同じトゲウオ科の陸封性イトヨと交雑した個体と置き換わり、純粋なハリヨは地蔵川から消えたと思われましたが支流で発見され、醒ヶ井養鱒場やハリヨの研究をしている小中学校などに保護されたそうです。

・醒ヶ井養鱒場には「梅花藻 ハリヨ池」があり、ガラス越しに観察できるそうです。藻が茂る前の3月頃が観察しやすい時期だそうです。